



平成6年10月9日長野県上田市、当社隣接の モービル油槽所で発生した大火災の教訓について

北 村 武

(日本オイルターミナル株式会社上田営業所 受託会社備ジェイアール貨物・信州ロジスティクス上田営業所所長)

今から、丁度12年前のあの忌まわしい大火災発生
の事について、少しでも記憶が残っている
内に印し、再発防止の一助となれば幸いです。

- 1 発生日時 平成6年10月9日 18時15分頃
- 2 発生場所 上田市下塩尻波草348-1
モービル上田油槽所
- 3 発生原因 配管取り付け工事中の事故。漏れたHガソリンのペーパーに何らかの火元が引火。(静電気、電灯のタップ外れ、重機によるショック引火?)
 - 日曜日の夕方、消防本部の完成検査許可を受ける前に許可無く配管に通油し、事故となった。
 - 出荷ラックの増設工事中であり、元タンクの開閉バルブは事務室内でリモートコントロールにより、開閉操作が可能であった。
 - まだ、開通していない配管バルブの元タンクを事務室内のリモートスイッチで誤って操作し、通油させ、満杯に入っていたHガソリンが漏れ、このペーパーに何らかの引火源により爆発したと思われる。
 - 延焼タンク 3基
 - 焼失実容量 凡そ250kl (ハイオク、Rガソリン、軽油)
 - 廃油処理 54kl
- 4 鎮火時間 10月9日21時56分 凡そ3時間40分ほど燃焼していました。
- 5 その時、私の行動

- 当日、日曜出勤し、帰宅、家族と夕食をとっていた。
- 18時30分頃と記憶していますが、営業所の宿直者から電話で「隣のモービルで大火災発生。延焼中、直ぐ出社しろ」とけたたましいとも絶叫ともとれる声で、緊急連絡が入った。

茶碗を放り出し、直ぐ2Fに駆け上り、西上田方面を見ると北の空が紅蓮の色と化し、大爆発の様相を呈していた。

直ぐ、社の制服に着替え、緊急連絡簿により、次ぎの社員に連絡をとり、通勤路を営業所に向かった。私は営業所とは近く、凡そ5~6分で到着したと思う。

この時はまだ、消防等の非常制限は無く、私は営業所に入る事が出来た。

営業所の入り口付近に、当該モービル油槽所の所長さんが、素足で紅蓮の火災現場を直視し、立っている姿が今でも目に浮かびます。

体全体が焼けただけ、救急車が来るのを直立して待っていたものと思われました。

営業所の広場はゴツタ返しており、上司の業務課長から消防ポンプのガソリンの残を確認するよう指示され、ペール缶をみると、殆ど「空」であった。

その事を伝えると課長から近隣のスタンドからガソリンを購入してくる様指示されたので、急いで自家用車で構内から出ようとしたが、既に非常警戒が実施されており、

ヤジ馬も多く集まっていて自家用車は使用出来なかった。自転車を出してペール缶を縛り、近くのスタンドでガソリンを購入した。

この時は国道も通行止めになっており、鉄道線路も列車は止められていた。

この夜、結局消防用ポンプへ追加するガソリンを2度スタンドまで購入に行った。

営業所の消火ポンプを運転し、この圧力を常設ポンプ車に繋ぎ、高い所まで圧送し、火災現場への放水と当社の隣接タンクの引火予防の冷却放水を続けた。

当社の上空に取材用ヘリコプターが数機飛来し、ホバーリングをしながら写真撮影をしていたが、気がきでは無かった事が思われます。現在は火災現場付近の上空でヘリによる取材撮影はしてはいけない様になっているのでしょうか。二次事故の危険性は大きいと思われました。

事故を反省して。

良かった事

- ① 当社社員が危険物職場の近い所に2～3名ぐらい住居があり、咄嗟の手当てが出来て良かった。

自家用車で営業所まで

2分	到着できる所員	1人
同	8分	1人
同	10分	1人

この3名は消防本部の非常線が張られるまでに営業所構内に入り、宿直者と協力して、電話対応や、写真撮影、記録の保持に努める事が出来た。

- ② 非常時連絡表の掲示と電話機のそばに置いてあった事。

咄嗟の時には壁に張ってある「非常時連絡表」を見ながら電話するより、電話機のそばにB-4の物を置いていたため、あわてる中でも確実に

に連絡がとれた。

- ③ 年に数回の消火栓放水訓練をしているため、非常時の各自の連携が良くとれた。

- ④ 危険物施設に勤務しているので、非常時に不安の中にも対処の仕方を心得ていた。

- ⑤ 地元、広域連合の訓練。

この大火災発生の数ヶ月前に上田地域広域連合消防本部が傘下の消防団と当地で訓練を実施しました。

この経験が実際の大火災での水路確保や、隣接当社への被害防止に大いに役立った事になりました。

反省点

- ① 防ポンプの燃料は多めに保管している事がのぞましい（実際の火災で不足し、購入に行った。（常時は20ℓしか保管していない。）非常制限がかかっていて自家用車が出れなく、自転車で最寄りのスタンドまで購入にいった。）

- ② 被害者保護の欠落

火災等、ヤケドをした人には即冷水で受傷部分を「冷やす」事が原則である事を赤十字の講習会で習っていました。体の表面からの「熱」が皮膚を通して筋肉質まで伝播していくため、強い熱のため、筋肉質が破壊され、皮膚呼吸も出来なく、口・鼻から気管を通る熱で「気管内熱傷」を負うため、大人の場合、体の約20パーセントにヤケドを負った場合は人命に著しく危険であると習いましたが、当日は路上にジット立って火災現場を凝視していた当事者の方に「手当て」をしてあげる事ができませんでした。

自社の施設を火災から「守る」事のほうを優先した事になってしまいました。

もし、自分でできなかつたら、近所の方（ヤジ馬）に「水で冷やしてやって下さい。鼻に水を濡らしたタオルを当ててやって下さい。」と一言、救護依頼をしてやればもしかしたら助かったのではなかったか。と13年近くたった今で

も悔いが残ります。

○ 火災鎮火後の始末

焼け爛れ、変形したパイプ群から「ポチャポチャと」と音と共に油が滲み落ち、これを受け缶で受け、空ドラムに移し、再び満になるとまた受けた。いつ、自分の体からの静電気に引火するか恐ろしい思いで数年は「夢」に何度となく見た。

モービル大火災を忘れるな！

平成16年10月31日に「上田市消防団大規模火災訓練」を早朝より、当社構内で実施しました。

「西上田地区の大火災を忘れるな」を合言葉に、発災から10年目の節目に、日曜日の午前6時30分から上田市消防団、上田地域広域連合、地元塩尻地区自治会の皆さんによる、実践さながらの訓練でした。本職によるビデオ撮影も今後の教訓や後継者へのテキストとして、使用するための大規模なものでした。

当日の「目的」には、この訓練は、上田市消防団および消防本部が連携し、大規模危険物施設の火災に対応するために実践により近い形で演習を行い、消防団各方面の連携をより高め、技術高揚を図ることを目的とする。とありました。

当日の参加者は消防団関係者で171名、地元自治会から40名、日本オイルターミナルから全所員の合計230名程からなる大人数でした。

地元自治会の婦人部の皆さんは早朝にもかかわらず、オニギリの炊き出しを全、出勤者分作っていただき、美味しく頂きました。感謝いたしました。

「災害は忘れた頃にやってくる」の言葉どおり、いつでも無事故で過ごせるよう、施設の塗装、除草、機器の点検等を全員で保守しております。

機器に手を添える事で異常が感知出来ます。各施設、パイプラインをいつも綺麗にする事で「漏れ、変形」等を触手する事で異常の有無が

伝わってきます。

所員全員で「目くばり、気くばり」を行い、あの悲しい、莫大な恐ろしさ、被害の甚大さの大災害を二度と再び発生させないよう日々これからも精進に努めます。

参考資料

上田地域広域連合消防本部発行

火災当日出動消防関係	出動人員	出動車両
消防職員	121名	
消防車両		30台
消防団員（広域も含め）	571名	28台
上田市職員	53名	
計	745名	58台

死者 3名（モービル油槽所1名、工事関係業者2名）

負傷者 1名（工事業者）

損害額（直接の焼損油代）1億1千300万円

（タンク及び配管の撤去、残油の抜きとり、及び再生費、防油堤の撤去その他経費は除く）（上田地域広域連合消防本部資料から）

隣接信越線の通行止め時間

4時間35分間（18：25から23：00）

※ 最終的にモービル油槽所は油槽所再開を希望しましたが、地元住民は再開に関する安全策に納得せず強い反対に遭い、再開は出来ませんでした。一つの大きな事故が職場を無くしてしまった。安全施策がどんなに充実しても、最後は「ヒューマンエラー」に行き着くと思います。

最近、各地の危険物職場で事故が多発傾向にある現状です。

企業も効率化を求めすぎる傾向にあるのでは無いでしょうか。危険物施設の保守、保安に関する要員までも外注化する傾向にありますが、直接自分の職場を熟知している社員による「直接保安」が最後は職場を守り、トータルコストでプラスになると考えます。